

教員の自己点検・評価シート（2022年度春学期）の分析

2023年5月26日
教学マネジメント会議

1 自己点検・評価シート作成及び分析の意義

- 1) 授業科目レベルにおいてPDCAサイクルを作動させること。教員による目標設定、実施・達成状況の把握、自己評価と次学期へ向けての改善点の認識が重要である。
- 2) 学位プログラムレベル、全学レベルにおけるPDCAサイクルを作動させること。すなわち全体的状況の把握、良い事例の発掘、教育改善のアクションへの繋がりが重要である。

2 全体的状況の把握

- 1) 自己点検・評価シートの作成提出を通じて、各教員が講義レベルにおける点検と改善に取り組んでいることが確認できた。
- 2) 全般的にみて、多くの科目が授業の到達目標を「達成できた」、「概ね達成できた」とコメントしていた。この認識は、講義別成績統計表での合格率と整合する。
- 3) 授業評価アンケートの回答率の低さを指摘する教員が少なかった。
- 4) 対面講義を含め、多くの科目で、Google ClassroomやGoogle Forms、Google ドライブなどのオンラインツールを活用していた。特にGoogle Classroomについては、ほとんどの科目が開設し、各種連絡、資料配布、課題・確認問題の配布・提出、質疑応答などに活用していた。その有用性を指摘する記述も多い。オンラインツールが、対面講義においても運用改善・授業時間外の学習の促進に貢献していることが確認できた。
また本学ではGoogle Classroom開設を推奨したが、多くの科目で共通するツールを運用することが、学生・教員双方のツールへの習熟に寄与し、活用促進につながっていると考えられる。

3 良い事例の発掘

1) 学習意欲の涵養

学生の学習意欲の涵養を引き出そうとする工夫が多く見られた。

専門教育では、時事問題や、具体的事例・身近な例を取り上げることで、学生の関心を喚起する取り組みが多かった。また、写真、動画などのメディアを用いることで、学生の関心を促し、具体例を通じた理解を高める工夫も見られた。

2) アクティブラーニングの取り組み

ミニツペーパーやグループディスカッションをはじめ、何らかのアクティブラーニング的取り組みを行っている科目も多く見受けられた。

3) 双方向性の確保

ミニツペーパーや小テスト、質疑等に対するフィードバックを通じて、学生との双方向性を確保しようとしている科目も見られた。特に遠隔講義では双方向性確保の重要性に関する意識が強く、各教員が制約がある中でも創意工夫に取り組んでいた。

4) 数理・情報科目

練習問題や課題の内容の改善を通じ、理解度向上を図ろうとする工夫がみられた。

5) 演習でのレポート指導

基礎演習・発展演習で、レポート指導改善に取り組んでいる。形式面の指導より、内容面の指導を課題と記載した教員が多かった。

6) 実践的日本語教育

留学生向けの日本語教育科目では、実体験と関連付けて学ぶよう授業をデザインし、発言の場を促す工夫を行っている。特に「下関」に関する資料収集や発表を通じて、日本語運用能力の向上を図る取り組みを行っている。

4 改善事項の発掘

1) 数学・統計に関連する科目で、学生の理解度に差があるとの記述が散見された。

練習問題や説明方法などの講義レベルでの内容改善はすでに取り組まれていることから、今後は複数科目間の連携もあわせて行っていくことが課題と考える。

2) 初年次教育では、講義内容や評価基準の周知など、情報の提供に改善の余地があるとの記述があった。

3) 上位の学年では、講義内容や説明方法より、配布資料の内容（分量・レベルに関する事）の改善の課題に関する記載が多い傾向にあった。社会の高度化・複雑化に伴い、教育として伝える内容の取捨選択が課題となっている可能性がある。

4) 能力に応じた語学学習

語学能力にばらつきがある中、授業内容の理解を正しく確認することが課題との指摘があった。

5 アクションに向けての要検討事項の提示

1) 授業評価アンケートの回収率向上の方策

2) 学生の学修意欲の向上に向けた取り組みの実施

3) 関連する授業科目間における講義内容の調整や連携に向けた検討